

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町 京都大学教育学部図書室 (竹村心気付)

TEL 075-751-2111 (内3013)

京都国立博物館における 図書管理の現状と課題

釜井 紀美代

京都国立博物館には、百年に及ぶ歴史の中で、陳列室に展示される美術・工芸品や考古遺物のほかに、写真や文献など多くの学術資料が保管されている。これらの中で特に図書資料を対象とし、以下にその管理の現状と今後の課題について述べてみたいと思う。

現在当館で所蔵している図書資料は、明治以後の美術史、歴史に関する専門書を中心に和書、漢書、洋書約4万冊のほか、学術雑誌や大学、博物館・美術館等の紀要・年報類と展覧会目録約2万8千冊を数える。

これらは館内学芸員の調査研究へのサポートを目的として利用されており、外部公開はされていない。従って常時の利用業務はないが、それ以外の受入、登録、整理、保存等の日常図書業務全てを私1人で行っている。

「私は千手観音じゃないのよ。」という愚痴も大図研会員の皆様には、御理解いただけるかと思う。

私が当館の図書業務にたずさわったのは3年前である。初めて書庫の中に入った時、蓄積されたほころの歴史もさることながら、書架の乱れは甚だしく、列品の保管との大差に驚いた。業務上でも、受入、図書カード記入、帳簿作成に二重三重の手間のかかっている部分があり、世のコンピュータ時代に対し、当

館の旧態依然たることに驚いた。

そこで、私は従来の図書管理を見直して、次の4つを問題提起し実現に向けて努めた。

①配架図書の整理

従来書庫で本を探すのに「宝探し」的な勘に頼る要素を持っていたが、勘の悪い私にはとても困難で、早急に書庫を整備する必要があった。そこでアルバイトの手を借り、のべ2週間を要し分類別配架に整理すると同時に欠本調査も行った。

②独自分類の検討

現在の出版物の多様性に独自の分類では対応できなくなってきている中で、蔵書は館員のためのものであるけれども、また広く研究者の用にあてるべきものと思った。そこで東京・奈良国立博物館に倣い、日本で最も広く行われているNDCの採用を検討し、昨年度より実施している。

③図書カード書式の統一

従来図書カードは、著者名、書名、分類カードそれぞれに記入のし方が違い、しかも1枚1枚手書きであるために、多くの労力を費した。これをNCRに準じて基本カードを作成すれば、労力は半減できる。これは新分類の採用と同時に実施している。

④図書業務の機械化

蔵書が増大するのに対し、図書業務の人員は増えずとならば、当館の煩雑な図書業務を一元化し省力化を図らねばならない。そのために機械化が急務となってきた。諸機関の協力もあり、昨年9月よりコンピュータが稼働している。1度データ入力するだけで、目録カード、増加目録、原簿に至るまで作成してくれる。また新分類の図書はコンピュータ検索が可能である。

図書管理の合理化を進める中で、徐々に館内の図書管理を取り巻く環境も変わってきたが、今後の課題としてさしあたり次の3つのことが考えられる。

①旧分類の新分類への改訂とデータベース化

「2種類の分類があっては不便だ」という利用者の声はうのみにできない。旧分類図書を新分類にかえなければならないのと同時に、情報化社会に備え、今までの旧分類図書データを入力する必要がある。かなり経費がかかることが予想されるが、早急に作業の準備を

進めていかなければならない。

②図書資料の公開

博物館の第一の使命は勿論展示であるが、よりよい展示を行うためには展示品に関する資料の収集、調査研究も欠くことができない。当館の場合、その一手段として従来の閉鎖性を緩和して、「図書資料の公開」が必要だと思われる。所蔵図書資料には貴重なものも少なくなく、「宝の持ち腐れ」とならないためにも、広く研究者や文化財関係者などに活用されることが望まれる。この構想を具体化していかなければならない。

③情報網の拡大

現在、東京国立文化財研究所より美術史とそれに関連する雑誌のうちから主要なものを磁気テープの形で提供を受けているが、そのような形を広く拡大し、より多くの資料収集をしていかななくてはならない。

京都国立博物館の図書管理は、遅まきながら近代化へ一歩を踏み出したところである。

(京都国立博物館資料管理研究室)

「先輩図書館員から聞きとりをしよう」

廣庭基介

ここ数年、図書館員の世代交代が進行している。1900年頃に生れて、いくつもの戦争を経験し、多くの友人、家族を戦火で失いながらも兵役以外は一貫して図書館で働き通してきた私たちの師匠格にあたる古い司書が一人又一人と白玉楼中の人となって行くのを見る。私たちの身近かでも小野則秋、谷口寛一郎、村橋ルチアなどの諸氏の顔が浮んでくる。この司書たちはわが国の大学図書館司書としては第2世代に属する人々である。では第1世代の司書とはどんな人たちか、それはここにあげた小野、谷口、村橋などの諸氏に対して図書館の仕事を教えた人々である。その人々は私たち(本稿の場合、私たちとは、1930年代生れと理解されたい)が生れた頃にはす

で現場から姿を消しており、私たちが図書館に就職した頃には殆んど鬼籍に入っていた人々である。

今、私はその第1世代の1人である笹岡民次郎という古い京大の司書の業績を調べているが、いろいろ手をつくしてみてもさっぱり判らないことが多い。笹岡司書は、京大が創設されると、その1カ月ほどのちに東京から京大へ赴任してきたのであるが、その前には東京図書館と呼ばれていた頃の帝国図書館に勤めており、次に美術学校(今の芸大)の図書室に移り、更に仙台の第二高等学校の図書館へ転勤を命ぜられたために東京を離れるか離れないか、という時に京都帝国大学への転任となり、京大の第1号司書となった人であ

る。当時まだ20才台であったが、出来れば
かりの京大で図書の整理に一人で立ち向った
のである。附属図書館が開設されるまでの2
年半、一人で約4万冊の図書を整理したのである。
その後昭和の始めに退職するまでに主任司書、
高等官6等まで累進して、当時の図書館界、
書誌学界、古書蒐集家の間に京大にこの人あり
と知られたもので、私自身が図書館員にな
った日から指導して下さった谷口寛一郎さん
の恩師でもあったという、とに角有名な司書
であった。新村出館長も笹岡司書には一目も
二目もおいており、その全集の中に何度もそ
の名を記しておられる。館が貴重書の展覧会
を催すと笹岡司書の集書からも出品されたも
のであったし、大正・昭和初期の図書館関係
雑誌、書誌学関係の雑誌に稀観書の解題や、
海外事情紹介の筆を執ってもいる。

このようなおしもおされもしない大司書の
ことを調べようとするのであるが、京大図書
館で判明することは、その勤務上の事項だけ
であって、今の所、家族がどうなったか、結
婚していたかどうか、京大をやめてからどこ
に住んで、いつなくなったのか、墓地はどこ
にあるのか、全く判らないのである。

これが大学の中における有数な司書の退職
後に受ける待遇の現実である。自分たちの周
囲を見廻して欲しい。相当活躍した司書のな
くなったあと、その職場で退職後の生活を追

迹して把握している所は殆んどないのではな
いか。ほんの僅かな人々、例えば竹林熊彦、
小野則秋など、青年図書館員連盟や、J L A
など全国的な範囲で健筆を揮ったような人々
を除くと、生涯の半分以上を一つの図書館の
運営に捧げたような司書たちの記録は、勤務
中の公的なもの以外はどこにも残されていな
いのである。これを同じ大学人でも教官と比
べて見ると如何に図書館員より手厚い待遇を
受けているか、よく判る。名誉教授の称号を
与えられ、退官記念、還暦記念、古稀記念な
どの論文集が作られ、なくなると追悼文集、
年譜、伝記などが編集される。

私は、図書館員の個人顕賞をすべきだと主
張するのではない。館の歴史とか、その職業
の歴史を知る上にも、公的な館の記録だけ
では味も深味もない薄っぺらなものしか判ら
ないから、私たちは今からでも、先輩たちに出
来るだけ昔の話を聞いて記録するようにすべ
きだと主張するのである。古事記の例を持ち
出すまでもなく、すべての歴史は「語る」こ
とからはじまるのであるから、オーラル・ヒ
ストリーを大切にしたい。それにしても、現
今のように一つの館に僅か2年か3年しかと
どまらないで、館から館へと移って行く人た
ちの伝記は誰がどのように書けば良いのであ
ろうか。

1989. 1. 25

(京都大学法学部図書室)

図書館と図書館員の将来に関する議論について

篠原俊夫

手元に「情報化時代に求められるライブラ
リアン像」と題する三輪真木子(エポックリ
サーチ社長)の講演記録がある。三輪は自ら
情報検索を業とする会社を興し、社長をつと
めるかたわら、母校慶応大学で教鞭を取る才
媛である。講演そのものは、大学の医学図書
館員を主たる対象としているため、これを

って大学図書館員全般を論じたものとは言い
難い面もあるが、大学図書館の未来を客観的
にみうる立場から発言されている分だけ、辛
辣であるが、何ほどかは暖かく、真実味があ
るとも言える。講演の要旨は、以下のように
なろうか。

その一 オリジナル目録の作成者としての

高度な専門業務に従事する者と既成の目録を購入し、所蔵を付け加えるだけの単純な目録作成者に二極分化する。言い換えれば、個別の大学における専門家としての目録作成者は不用になる。整理業務の軽減化に伴い、業務の中心は、調査業務の方へシフトしてゆく。

その二 目録を作れるとか、チルドレンズ・ライブラリアンシップとかを専攻してきた人は、もはや図書館に必要なくなってきているとはっきり言う人もいる。それが目に見える形であられたのが、米国の伝統的なライブラリー・スクールの廃校であり、逆に、インフォメーション・サイエンスを表に掲げた学校が隆盛を誇り、卒業生の就職先も多様化しているという現実である。

その三 図書館教育で一番欠けているのは、コスト感覚と品質管理である。より優れたサービスは無料では無理であり、受益者負担を求めるといことも考えられるが、そのためには、図書館の生産性が高くなったことを、第三者にも納得させることが必要である。

三輪はあえて触れてはいないが、上記の講演要旨に二つほど付け加えれば、ほぼ現在における図書館と図書館員の未来像論のステロタイプができあがると思える。その2項目をその四、その五として付加してみる。

その四 従来の書物を中心とする出版形態は、電子出版にとって代われ、それに伴い図書の所蔵を前提とした図書館の利用形態が変わる。すなわち、図書館はエンドユーザーが端末を通じて直接アクセスできる情報の集積所とも言うべきものになる。すなわち、壁なき図書館の実現である。

その五 図書館の利用形態が変わって、エンドユーザーが直接に情報にアクセスする時代になってもなお図書館員の存在は不可欠なものと言えるか。

三輪が個人的な見解として、チルドレンズ・ライブラリアンがもはや不必要になったと言っているわけではない。米国における図書館をとりまく厳しい現実を指摘しているにすぎない。それは分かっているが、従来の専門職

の在り方を根底から否定することになるのも事実である。資料の内容のほぼ全面的に理解し、一人々々の利用者の要求を理解し、きめ細かいサービスができるというのが専門職の条件であるとすれば、それを唯一実現できるのがチルドレンズ・ライブラリアンと言えるはずである。

図書館サービスの有料化の議論も今に始まったことではない。レーガンの経済政策は徹底して図書館における受益者負担方式によるサービスの有料化であった。全世界的規模の目録の形成や巨大なデータベースの作成に膨大なコストがかかることは事実であるが、進め方によっては、図書館の無料化原則のなしくずしの否定につながる。金持ちには金持ちなりのサービスを、貧乏人には貧乏人なりのサービスをするのが真の平等だという意味のことをある経済学者だか政治家だかが述べているのをライブラリー・ジャーナル誌でよんだ記憶がある。時あたかもレーガンによる経済政策＝レーガノミックスが取りざたされた頃のことである。

あくまで私的推測にとどまるが、電子出版が全面的に従来の書物を中心とした出版形態にとってかわることは、近い将来においては、まずあり得ないと思えるのが妥当であろう。その限りにおいて、壁なき図書館の実現も十年程度のスパンでは、実現しそうにもない。出版形態が変わらぬ限りという条件つきで図書館のあり方はかわらず、従って図書館員の存在も多少の変化はあっても必要であるというのが、三段論法的図書館の未来像ということになる。しかし、図書館員がサーチャーという名の情報の仲介者として、どんな時代にも必要とされるという見解には疑問符がつく。そこにしか未来の図書館員の生きる道がないとすれば、図書館と図書館員の未来はなきに等しい。

では以上のような大上段の議論と地道な研究活動を旨とするわが大学図書館問題研究会とをどう結びつけるのかというもっともな疑問が生じるかも知れない。やや唐突な感はある

が、激しく流動する大学図書館の現場で実践
にうらづけられた研究を通じて、これらの根

本的な疑問と課題に私達なりの答えを見出す
ことができればと思う。

(京都大学医学図書館)

図書館員のための情報検索講義 第6回

第1章 Chemical Abstracts

第3節 Index Guide (つづき)

ふつう、シソーラスにおいては、上位語・
下位語・関連語について、ひもづけがきち
りなされている。(MeSHやJICST科学技
術用語シソーラスを想起せよ。)その点、CA
のIndex Guideでは、ご覧いただいたら
わかるように、非統制語から統制語への導入
や関連語についてのひもづけはわかるが、言
葉の階層上の位置づけは一目判然とはしない。

それを補うものと言えようか、Index
GuideのAppendix Iとして、
Hierarchies of General Subject
Headingsがある。これは、General
Subject Indexの索引見出し語につい
ての階層分類表である。分類表とHierarchy
Indexの2部で構成されている。Hierarchy
Indexでは、見出し語がアルファベット順
に並んでいる。そこで自分の調べたい見出し
語の所をみると、数字とアルファベットで分
類表中の位置が示されているので、それにし
たがって分類表に行き、階層関係を知ること
になる。もっとも、このようなことばによる
説明では分かりにくい。機会をみつけ、実際
にIndex GuideのAppendix Iをみ
ていただきたい。(なお、詳細については、
文献①、②参照)

第4節 Chemical Abstracts Service Sorce Index (CASSI)

利用者が、文献のコピーのreferenceの欄
を示して、「この雑誌はどこに行けばあるか。」

とたずねられて、ときどき、はたと困るとき
がある。というのも、雑誌名が省略形で表さ
れているので、自分が慣れ親しんでいる省略
形ならともかく、いきなり省略形を見せられ
ても学術雑誌総合目録を引きかねることにな
る。

そんなときに役に立つのが、Chemical
Abstracts Service Sorce Index
(CASSI)である。CASSIは、CAが採録し
た原資料の書誌事項と所蔵情報についての目
録である。見出しの配列は、出版物名の省略
形のアルファベット順であり、出版物名のフル
ネームや、出版者名、等々の書誌情報と、
その雑誌の世界のいくつかの図書館(日本の
場合は、大阪大学・東北大学・JICST及
び国会図書館)での所蔵情報を知ることがで
きる。

現在は、1907～1984年のCumulative
版が出ているが、その後に増えた情報につい
ても、季刊で出ているCASSI Quarterly
Supplementにより、把握することがで
きる。(なお、文献③参照)

おわりに

6回にわたって、Chemical Abstracts
について、私なりに説明してきたが、今回で
いちよう止めることにした。私の化学に対す
る知識の無さと、現物を手にせず説明する
ことに限界があるからである。

データベースの機械化の進展の中で、オン
ライン検索を含めて、CAは多様な検索が可
能になっている。

ただ、大学図書館の場では、まだまだ、デ

データベース作成機関やベンダーの提供するいろんなサービスを十分に使いこなせていないのが、現状である。

図書館員としても、利用者に資料を提供する側として、それなりに資料を知る必要がある。索引はどんなのがあるか、書誌事項はどのような形で入っているか。できれば、利用者と同じように、自分の関心のある点を、検索することにより、いかにして情報に接近していけるのかを、実体験してもらいたい。例えば、『C A Sの活動について論じている文献で、最近10年間位のもの』を調べるなら、どの索引を使うとよいだろうか。また、どんな言葉を見出し語に選ぶのが適当だろうか。C Aの索引やIndex Guideの問題に直面すると思う。

読者の方には、後掲④⑤⑥の文献に目をとおして頂ければ、と思う。

④は、C A Sの活動と、C Aの内容の一端を興味深く紹介している。

⑤は、C AのSubject Indexについての、詳細な研究である。

⑥は、オンライン検索が発展する中で、C Aの利用の多様化を論じている。

中途半端な形であるが、これでChemical Abstracts についての講義を終わる。

文 献

- ① 『化学・医学・生物医学の文献調査法』
笹本光雄 地人書館 p. 41 - 43 (1978)
- ② 『ケミカル・アブストラクツの使い方』
化学情報協会 p. 83 - p. 97 (1987)
- ③ 同 上
p. 303 - p. 309 および p. 322 - p. 323
- ④ Weisgerber, David W.
『Chemical Abstracts Service
のデータベース — その採録基準と編集・
索引方針 — 』JAICI フォーラム No. 20
p. 1 - p. 10 (1985)
- ⑤ 川村敬一 『Articulated
Subject Index の構造的特性と機械
化プログラム』 情報管理 vol. 24 No. 5
(1981) p. 447 - p. 456
- ⑥ 笹本光雄 『二つの“L” - Chemical
Abstracts の索引の構成とオンライン・
システムにおける発展』 色材協会誌
vol. 57 No. 3 (1984) p. 148 - 154
(京都大学薬学部 菅 修一)

『大図研大学』の実施について

大学図書館問題研究会京都支部委員会

大学図書館問題研究会（略称大図研）京都支部委員会は、図書館員の熱心な研修要求に応えて、系統的で継続的なカリキュラムを編成し、2期15回に及ぶ『大図研学校』を開校し、延べ700名余の受講生を大学図書館の現場に送り出しました。

しかし、今日の大学図書館をめぐる状況は誠に厳しいものがあり、そこで働く図書館員は、日常業務に追いまくられ、研修の必要性を身に染みて感じながら自己研修は無論、職場研修、館外研修への参加さへもままならないのが現実です。

また、大学をめぐる情勢の変化やそれに即した図書館の対応策の検討・立案・実施と追い立てられ、財政・人事政策の貧困な状況をそのままに、目先の新しさを追い求めているのが現状ではないでしょうか。

私達は、目まぐるしく変化する情勢に目を奪われることなく、過去を振り返り、今日を見定めるならば、日本の大学と大学図書館にとって教員と職員の共同・協力による大学教育の改革と教職員の研究・研修にあると考えます。

大学図書館員の研修は、今日の図書館員の養成・研修の現状を踏まえ、司書講習または司書課程修了後の継続教育として位置付け、現行の養成カリキュラムを補強するものでなければなりません。

大図研京都支部委員会は、当面、外書講読・資料組織論を中心とした基礎科目か、または、外書講読・参考調査資料論を中心とした基礎科目と資料研究を中心とした専門科目を配当した研修カリキュラムを提案し、『大図研大学』として実施する事を提案します。

「大図研大学」カリキュラム第1次案

I 基礎科目

<u>科目名</u>	<u>開設期間</u>	<u>授業概要</u>
外書講読 朝鮮語入門 資料組織論	毎月1回通年 10回程度 8～9月 集中講義	図書館・情報学外国雑誌論文輪読中心 分類・目録作業のための語学講習 NCR 1987年版演習 AACRⅡ講義・演習 件名目録法概論 分類法概論
参考調査資料論	8～9月 集中講義	長澤雅男著『情報と文献の探索』丸善 1987.8. テキスト講義・演習
科学史	毎月1回通年	理工学図書館員・理工学文献資料論学習者 のための演習

II 専門科目

<u>科目名</u>	<u>開設期間</u>	<u>授業概要</u>
資料論研究方法	4月～5月 集中講義	社会科学資料論研究方法 人文科学資料論研究方法 理工学文献研究方法
法学文献資料論	2回程度 集中講義	法学文献解題演習
経済資料論	2回程度 集中講義	経済資料解題講義
英語・英文学 文献資料論	1回程度 集中講義	未定
国語・国文学 文献資料論	1回程度 集中講義	未定
理工学文献資料論	2回程度 集中講義	未定
日本史資料論	1回程度 集中講義	未定
ドイツ史資料論	1回程度 集中講義	未定
春のコンパ 秋のコンパ		参考・閲覧系図書館員交流会 受入・整理系図書館員交流会

講演会 おしらせ

日 時 1989年3月25日(土) 14～16時

場 所 京都大学医学図書館 3階 セミナー室

テ ー マ 平安女性はいかに生きどのように恋をしたか

— 歌人伊勢, 紫式部, 空蝉を中心に —

講 師 竹 本 文 夫 (同志社大学人文科学研究資料係)

大 図 研 京 都 支 部 ・ 共 催
京 都 支 部 京 大 班

千年の昔に書かれた源氏物語は今なおその新鮮さを失わず、現代の我々に様々なことを問いかけています。アメリカにおいてもっともよく読まれている日本の文学作品も夏目漱石や三島由紀夫の作品ではなく源氏物語であるといえます。

このような源氏物語は、一体いかなる背景のもとに、どんな人物によって書かれたのか。作者はどんな人生を送ったのか。先人の影響をどのように受け、どう発展させたのか。そして源氏物語で何を訴えたかったのか。

こうした問題意識に基づいて、紫式部にもっとも大きな影響を与えかつライバルでもあった歌人伊勢と式部と源氏作中人物空蝉の生き方や生涯をたどってみたいと思っています。なお、時間があれば若干文献紹介もしたいと思います(資料として文献目録は用意します)。